



東北大学大学院国際文化研究科

同窓会会報 第15号



編集・発行 東北大学大学院国際文化研究科同窓会事務局 発行日：2017年3月24日

〒980-8576 仙台市青葉区川内41 TEL (022) 795-7556 FAX (022) 795-7583 E-MAIL <dosokai@intcul.tohoku.ac.jp>

「連携」がこれからの鍵となる

小野 尚之

(国際文化研究科同窓会会長・言語科学研究講座教授)

平成29年度から国際文化研究科長を拝命します小野尚之と申します。この春から研究科長職と同時に国際文化研究科同窓会の会長職の責務を担うことになりました。まだ色々和不慣れな点もありますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、会長の就任にあたり、現在本研究科が置かれている状況と今後研究科が向かうべき方向、そしてそれに応じて同窓会が担うべき役割について所感を述べさせていただきます。まず、大きなところから始めると、本研究科の研究・教育の主要な分野である人文社会分野の研究は、今、日本において危機的状況にあると言わざるを得ません。少し前に「人文社会研究不要論」とも言えるような極端な意見が一部メディアなどで取り上げられたことは記憶に新しいところですが、そのような空気がなくなったわけでは決してありません。むしろ今後、特に国立大学に対しては一層厳しい要求が増すものと思われます。

そのような状況は東北大学においても例外ではありません。押し寄せる大きな時代の波を乗り切るため、黒田前研究科長が就任された4年前に、創設以来20年余り続いて来た本研究科の教育組織を見直し、新たな時代へ対応できる体制へと移行する大きな改革が始まりました。その改革が実を結んで、平成27年度には未来志向で作り上げた新体制の講座組織がスタートしました。これによって同窓生の皆さんが育った講座が消えてしまい、寂しい思いをされた方もいらっしゃるでしょうが、国際文化研究科が培ってきた精神はそのまま継承されていると信じております。

このような改革の断行によって、大きな波を一旦乗り越えた感があります。現在、文系の他部局が組織改編に四苦八苦する姿を横目で見ると、本研究科は一步先行したように思えることもあります。しかし、さらに大きな波が襲って来るのは必至であり、先を見通したたかな戦略としなやかに時代を乗り越える感性を以て、次のステップに結びつける不断の努力が求められるところであります。

このように国際文化研究科は、他の文系研究科と同様、逆風の中に置かれていると言わざるを得ませんが、このような状況を打開するためには、部局の枠を越えた連携が鍵になってくると思います。現在、文系各研究科が共

同して進めている「日本学」の研究重点拠点の形成およびそれと連動した国際共同大学院の構想、あるいは本研究科と環境科学研究科、農学研究科、医学系研究科、災害科学国際研究所などが進めている「災害科学・安全学国際共同大学院」構想などがそのような試みとしてあります。今後もこのような連携事業が増えていくものと思われまます。

組織と組織の連携を深める際に決定的に重要なのは、結局はその根幹にある人と人とのつながり、すなわち人的ネットワークであると思います。人と人の間に信頼関係がないところに連携というものは生まれにくいわけです。そう考えると、人的ネットワークが今後の研究科の行く末を決定する重要な要因のひとつになることは間違いがないと思いますが、その重要な役割を担うのが同窓会であると考えています。

昨年私は、国外で本研究科の知名度をアップするために初めて行った試みとして中国北京での広報活動に参加してきました。その際、訪問先の大学との折衝から当日の案内を含めすべての手配をしてくれたのが、北京で仕事をしている本研究科の修了生でした。また、北京在住の東北大学の卒業生も集まってくれて、色々な情報交換をすることができました。本当に心強く感じました。今後ますます世界に向けた研究・教育両面でのネットワーク展開が必要になってきますが、世界中に広がる国際文化研究科の同窓生のネットワークである同窓会がその一翼を担うような組織であってほしいと願う次第です。

第15回同窓会総会と講演会のご案内

第15回同窓会総会と同窓会講演会を次のとおり開催します。またこれに引き続き国際文化研究科平成28年度修了祝賀会が開催されます。同窓会会員の皆さまにはどちらにも奮ってご参加くださいますようご案内申し上げます。

日時：2017年3月24日（金）15時～

* 研究科学学位記伝達式に引き続き開催しますので、会員の皆さまは14時20分の学位記伝達式からご臨席ください。

場所：マルチメディア教育研究棟6階大ホール

講師：北原 かな子教授

(青森中央学院大学・

比較文化論講座後期課程修了)

演題：「国際文化研究科で学んだこと-文化研究を志して-」

国際文化研究科同窓会事務局

第14回総会と講演会の報告

第14回総会を2016年3月25日にマルチメディア教育研究棟6階大ホールにて開催しました。総会に先立ち、石橋麻衣子氏による講演会を開催しました。

講演会要旨

「マルコムXのヒロイズム研究が赤十字病院でどう生かされているか」

石巻赤十字病院 総務企画課

石橋 麻衣子

(アメリカ研究講座前期課程修了)

1. 研究との出会い

マルコムXに興味を持ったのは学部2年のアメリカ文学の授業がきっかけだった。授業のなかで1950-60年代に活躍した2人の黒人指導者のスピーチを聞く機会があり、そこでアメリカの夢(Dream)を語るマーチン・ルーサー・キング Jr.とアメリカを悪夢(Nightmare)と表現する2人の語り口の違いに驚くとともに、マルコムXの説得力のある話術に惹かれ興味を持つようになった。

学部時代はマルコムXの生涯と彼を取り巻く社会に焦点をあて、『マルコムXのカリスマ性』と題して卒業論文を執筆した。マルコムXは変化に富んだ人生を送った。彼は黒人牧師を父に持ち、マルコム・リトルとして幼少期を過ごす。父がKKKに暗殺された後は、非行の道へ走り墮落した生活を送り始める。20歳の時には、強盗罪で逮捕され刑務所へ収監される。その獄中で黒人イスラム運動組織 NOI: ネイション・オブ・イスラム(Nation of Islam)に入団し、出所後はNOIの導師として活動する。

当時のマルコムは黒人の民族的優越を説き、白人社会への同化を拒絶していた。しかしNOI内の人間関係に亀裂が生じると、彼は65年に同団体を脱退し、本来のイスラム教を学ぶためにメッカ巡礼の旅に出る。アフリカ諸国を訪問する中でさまざまな人種のイスラム教徒と交流し、白人を悪魔とするこれまでの姿勢を改め、アフリカ系アメリカ人統一機構を設立。アメリカ国家を超え、非白人の連帯を軸に活動を展開しようと試みた。しかし同年スピーチ中に銃撃され、志半ばでその生涯に幕を閉じることになったのであった。

卒業論文ではマルコムのライフステージ毎の変化やアメリカ主流社会の反応を追うことはできたが、自分なりの分析を加えることはほとんどできなかった。また卒業研究のなかでさらに興味深い点を見つけた。マルコムXの暗殺後から約30年後にアメリカ黒人文化のなかで見られた「マルコムXブーム」である。

マルコムの死後、キングを始めとする公民権運動家たちの活動により人種分離は撤廃され、白人と黒人は少なくとも公共の場面では同等に扱われるようになった。法律改正により公民権運動は成功に終わり、黒人の社会的地位も向上したように見えたその後に、人種分離を公然と訴えたマルコムXがブームとして蘇るのは非常に興味深いことである。

2. 研究との出会い

そこで本研究科への進学を決意し、『映画「マルコムX」における黒人英雄像の表象—人種・ジェンダー・ナショナリティの視点から』と題して修士論文を執筆した。ここでは、マルコムXブームのなかで最も大きな反響を呼んだ映画「マルコムX」(1992)を取り上げ、人種・ジェンダー・ナショナリティの視点からその表象を分析した。この映画で構築されているマルコムX像がこの時代に立ち現れることの意味を当時の社会背景や黒人文化(主にヒップホップ文化)と重ねて検討した。

映画で構築されているマルコム像は「アメリカの強い黒人男性」という要素が強固に押し出されたものであり、これは当時のヒップホップ文化と共通するものであった。当時のヒップホップは、社会からは「アメリカの黒人男性」による表現として限定的に捉えられ、暴力的な男性性が強調されていた。

またここでは映画やヒップホップで用いられた二項対立的図式を問題視した。黒人にポジティブなイメージを与え白人との二項対立的なヒエラルキー構造を逆転させようとしても、結局はその二元的枠組み自体を否定することはできず、しかもその過程で女性などのさらなる下位構造を生み出してしまっているからである。結局マルコムXブームで表現されたマルコム像は、アメリカ黒人男性のための英雄像であり、西洋中心的イデオロギーからは脱することはできなかったという当時の黒人たちによる文化的抵抗の限界を示した。

上記研究を進めていく中で、学んだことは大きく分けて以下の4点である。1) 論理的な思考、2) 明晰な文章表現、3) ポリティカルな姿勢、4) 脱構築の視点。多種多様な情報(先行研究や理論等)と自分の推論をすりあわせ考えをブラッシュアップしていき、論理を組み立て、自信をもってアイディアを披露することを繰り返し訓練できた。そして一見研究上の話題のようなことでも、身の周りで起こっているあらゆることは実は自分の学んでいるさまざまな理論や言説に当てはまり、日常生活のなかでも常にポリティカルにさまざまなことに向きあうという姿勢を身につけることができた。

3. 社会に出て

大学院卒業後は日本赤十字社に就職することができ、石巻赤十字病院で働くこととなった。最初は患者さんと接する機会の多いいわゆる「現場」の部署への配属となり、病院という独特の文化を持つ世界に戸惑うことが多かったが、命と向き合う現場という緊張感を心地よく感じることもあった。少しずつ医療の世界に馴染みつつあった2年目の3月、あの東日本大震災が起こった。発生時は病院で勤務しており、大揺れのなか患者さんへ声がけをしていたのを覚えている。その後は状況がよくわからないままに、必死に殺到する患者への対応をした。

被災地の中心で震災を経験し、全国・全世界からの支援に感動するとともに、臨機応変に対応することの重要性を学んだ。実際に、災害時の対応は予想できることがほとんどなく、生じる課題にその都度対応することばかりだった。普段から綿密な計画を立てることも大切だが、何かあったときに機転をきかせて対応できる柔軟性を身につけることも重要であると痛感した。

4. 最後に

研究科での教育のなかで身につけた4点は、実際に今の仕事でも生かされている。特に大学院で研究の過程で学んだ、課題を見つけ、それを深く掘り下げて改善のためのプランを立てていくというスタイルは、日々の仕事の進め方の基本姿勢となっている。また、論理的な文章表現、説得力のあるプレゼンスキルは、大学院で指導を受けながら修得したものが多い。さらには、物事を説明する上で選択しがちな二項対立を前提とした視点を解体し再構成する物の見方は、今でもわたし自身の物のとらえ方の中心となっており、そのような視点があるからこそ、職場の改善すべき点や課題が見える部分も多くある。今後もここで学んだ視点を生かし、研究内容をアカデミックな世界を超えて日々の社会生活のなかで実践していけるよう努めていきたい。

第23回国際文化基礎講座の報告

第23回国際文化基礎講座(平成28年11月)では「ことばは面白い!」と題して、本研究科の3教員が日頃の研究の一端を披露されました。ここにその講演概要をご紹介します。



「ことばを科学する」

高橋大厚 (言語科学研究講座教授)

言語は様々な要素から成り立ち、様々な切り口から研究されている。故に、言語学には多種多様な下位分野が存在する。その一つとして、人間の母語獲得や言語使用の基盤となる、脳内にあると考えられる言語能力のモデルを構築する試みがある。

モデルを作るためには、その元となる言語能力の解明

が必要であり、この立場で研究を行う学者は、人間の言語はどのような特徴を持ち、何故そのような特徴が存在するのかを明らかにしようとしている。そのようにして作られる言語能力のモデルは、言ってみれば言語学者により提案される「言語能力とはどのようなものか」という問いについての仮説の体系である。

現在有力と考えられている仮説の一つを取り上げてみたい。非常に概略的な述べ方をすると、その仮説は、どの言語においても主語(S)と目的語(O)と動詞(V)から成る文-例えば、英語の *Harry loves Ginny* や日本語の「昌幸が信繁を叱った。」などは、まずOとVが一つの構造体を成し、それにSが合わさってより大きな構造体を作っていると考える。便宜上、これを構造構築の仮説と呼ぶことにする。これによれば、自然言語における主語、目的語、動詞の三要素から成る文は、[S [V O]]、[S [O V]]、[[V O] S]、[[O V] S]の4パターンのいずれかになるはずである(角括弧[]は構造体を表す)。いずれにおいても、VとOが一つのまとまりを作り、その組み合わせはVOかOVの2パターンになる。これに、Sが組み合わされるのであるが、やはりSがVとOから成る構造体の左に来るか右に来るかで、合計2x2の4パターンとなる。

しかし、実際自然言語には上記の4パターン(SVO、SOV、VOS、OVS)に加え、VSOやOSVという基本語順を持つとされる言語が存在する。何か仮説を仮定すると反例が出て来ることは、どんな学問分野でも普通に起こることであり、その意味で言語学も例外でない。むしろ、反例の存在はしばしばさらなる研究の契機となることもある。上例においても、VSO語順を持つ動詞先頭型言語-アイルランド語などがどのような文構造を持つのが盛んに研究されている。

上記の反例に関する研究では、日本語研究からも貢献ができそうである。一般に日本語はSOV型言語に分類されるが、目的語が主語の前に現れるOSV文もSOV文と同じように容認される。例えば、多くの話者にとって、「昌幸が信繁を叱った。」も「信繁を昌幸が叱った。」もどちらも同様に許容される。しかし、SOV文は[S [O V]]という「適格な」構造を持つことができるが、OSV文はOとVで構造を作り、それにSを組み合わせて大きな構造を作るという原則からは作りようがない。

ここで、日本語のSOV文とOSV文を比較した実験の結果が示唆的である。話者による文処理の有り様の研究を文解析という。この分野におけるある研究で研究者は、日本語話者の被験者にSOV文とOSV文が正しいかどうかを判断させ、それに費やす時間を計測した。その結果、被験者はSOV文よりもOSV文の方により長く時間をかけるということがわかった。

また、話者が言語を処理している間の脳活動を計測し、それにより言語の脳内処理を研究する分野を神経言語学という。そのある研究で研究者は、SOV文とOSV文を処理中の被験者の脳活動を計測した。その結果、被験者はOSV文を処理している時の方が、SOV文を処理する時よりも多くの脳内の部位を使っていることがわかった。

これらの実験結果は、日本語ではSOV語順が基本となっており、OSV語順には何か特別なことが起きていると

いうことを示唆する。余計なことが起きているが故に、処理に時間がかかり、SOV 文には使われない脳内部位が使われると考えることができる。例えば、英語では SV0 が基本語順であることが標準的な仮定である。しかし、WH 疑問文では目的語として機能する疑問詞が主語の前に生じる。*Harry loves Ginny.*という平叙文に対応する疑問文は *Who does Harry love?*となる。この目的語を通常の位置とは異なる位置に置くことに特別な文法的操作が関わっていることがこの数十年の研究により明らかになっている。同様に、日本語においても SOV が基本語順で、OSV 文には特別な操作が関わっていると考えられる。

要するに、日本語では冒頭で述べた構造構築の仮説に従う形で、文は [S [O V]] という構造を持ち、この仮説から一見逸脱する OSV 語順は何か特別な操作によりその基本構造から派生していることになる。つまり、日本語における OSV 文の存在は構造構築の仮説に対する反例とはならないということが示唆される。

このように、言語学の中にはことばを科学的な手法で実証的に考察し、人間が持つ言語能力を解明しようとする研究プログラムが存在する。まさに文理融合の学際研究である。

コーパスを使った英語研究と英語教育

岡田 毅 (応用言語研究講座教授)

最初に「コーパス」とは何かについて、少し言語の研究の歴史に沿って分かり易く眺めました。自分が話せるから人間は自分の言語をよく知っていると思いがちですが、本当にそうでしょうか。それに、そもそも私たちは本当に自分たちのことをよく知っているのでしょうか。知らないから、知ろうとして、いろいろな学問があるのかもしれない。そして多分人間は自分たちがとても不完全な存在だと大昔から気づいていたようです。言葉の学問も、そんな人間という生き物の健気な挑戦のひとつで、別の言い方をすれば「自分探しのロマンの旅」なのでしょう。



次に、コーパスを使って何ができて何ができないのかを実体験していただきました。この体験を通して、やっぱり自分は自分が毎日使っている言語を実はよく知らないのだ、と納得してもらえたことと思います。

英語コーパスを手段として用いて、英語そのものを研究する分野があります。また幅ひろい応用範囲のひとつとして、英語教育への応用研究があります。この講義のおしまいは、不完全な自然言語のひとつである英語の研究のために用いられるコーパスを、英語の教育や学習というとても「(不完全で)人間的な分野」で活用することにはどんな魅力があり、どんな課題があるのかを具体例も用いながら一緒に考えました。



世界の言語の中の日本語

副島 健作 (応用言語研究講座准教授)

母語話者が日本語が「使える」からと言って、すぐに「教えることができる」とは限りません。言うまでもなく、何かを教えるためには教える内容を教える側が理解している必要がありますが、母語が話せるのは無意識的、無自覚的な能力だからです。母語話者が無意識に使用している自分のことばを教えるためには、それを意識的・客観的な形で理解し直さなければなりません。

そこで本講義では、日本語を教えることに少しでも興味を持っている方々に、世界の諸言語の1つ、すなわち、「外国語としての日本語」として捉え直す機会を提供することをめざしました。たとえ教えるという目的がなくとも、日本語を客観視することは、ことばへの視野を広げ、豊かな言語生活を送るうえで必要なことではないでしょうか。

まずは、国語教育との違いを意識しつつ外国人に対する日本語教育文法について考えてみましょう。学校文法の活用表がわかりやすいと思う方は少ないと思われるが、それはなぜでしょうか。まず、活用の名称がわかりにくいというのがあげられます。「未然」というのは「まだそうっていない」という意味ですが、未然形にはその意味を持つ形、打ち消しの「書か(ない)」と意思の「書こ(う)」の2つが同居しています。ここでの名称の名付けは意味が基準となっており、「仮定」形や「命令」形も意味が基準となっていますが、用言につながる「連用形」や体言につながる「連体形」は意味ではなくて接続という文法機能を基準にしています。「終止形」も文が他の文に接続するのではなく、終わることを示すという文法機能です。このように名付けが意味か文

法機能という異なる基準でなされ、それらが混在しているのも、活用表をわかりにくくしている1つの理由だと思われます。

活用表がわかりにくい2つ目の理由として、活用形は「未然」「連用」「終止」「連体」「假定」「命令」の6つでいいのか、という疑問があります。「未然」には上でも述べたとおり、打ち消しの「書か(ない)」と意思の「書こ(う)」の2つがあり、また、「連用形」には「書き」と「書いて」の2つがあります。形が違うのだから、それぞれ別々の活用形に分けて書くべきではないでしょうか。逆に、「終止形」と「連体形」はともに「書く」という同じ形なので、別々の活用形に分ける必要はないのではないか、という疑問が出てきます。

活用表がわかりにくい3つ目の理由として語幹の定義と扱いが曖昧だというのがあります。「語幹」は形の変わらない部分、「活用語尾」はその後ろの変わっていく部分を指しますが、「見る」「得る」「来る」「為る」は活用表では語幹が「0(ゼロ)」つまり語幹がないとなっています。すなわち、「見る」は「み」、「得る」は「え」を活用語尾としているわけですが、「み」、「え」はそれぞれ形の変わらない部分であり、語幹と言えるのではないのでしょうか。

学校文法の活用形はそれ自体が説明が必要な複雑なものであり、実際、日本語教育において使われることはほとんどありません。日本語教育では、「未然形」はなくなり、ない形「書か(ない)」と意向形「書こう」という2つの別々の形として扱われます。また、「連用形」のうち、「書いて」のように「-て/で」で終わる活用は「て形」と呼ばれ、違うものとして扱われています。

このように、学校文法の活用形を見直すことを通して、日本語の活用というものがどうなっているかを改めて整理することができ、日本語を客観的に見なおす機会となったかと思います。外国語を習得するためには文法を学ぶ必要がありますが、その文法をわかりやすく提示するためには、日本語がどのような言語かをあらためて意識する必要があるのです。

以上の事情を念頭において、本講義では、世界の諸言語と比較しながら日本語の特徴について考え、言語一般に対する認識を深めることを目指しました。文法教育の必要性や日本語教育における「文型」の捉え方とその具体的な内容を紹介したり、日本語の基本語順の特徴、つまり、述語が最後に来る、修飾・被修飾の関係が語順が一定で、修飾語が被修飾語の直前に来る、という特徴はOV言語の典型的特徴であり、ありふれた言語の1つである、ということを指摘したり、また、身近な言語現象の中から主語とは何か、日本語は主題優勢言語か、省略の現象にはどんなメカニズムが働いているか、など普段無意識に使っているさまざまな日本語の現象を見つめ直し、分析したりしながら、日本語という言語について客観的に観察し、どのようにわかりやすく説明できるかを一緒に検討しました。

近年グローバル化の波があわただしく押し寄せ、多くの外国人が日本を訪れるようになりました。地域においても日本語授業ボランティアなどが盛んに行われ、日本語教育はますます身近なものとなりつつあります。国際貢献のためと外国人に日本語を教えてみたいと思って

いる方も多いのではないのでしょうか。本講座により身につけた、日本語を客観的に観察する視点を、そういう場で活かしていただけたら幸いです。

国際文化研究科主催行事の報告

「創造する日本学」
—学際研究重点拠点の設置に向けて—
小野尚之(プロジェクト・リーダー)
(言語科学研究講座教授)



Global Japanese Studies Initiative

日本学

社会にインパクトある研究

D. 世界から敬愛される国づくり



創造する日本学

世界が共感する日本の文化の価値の探求

従来の地域研究としての日本学の特徴を異なり、日本文化の多面的な価値を抽出し、新たな文化の価値を創造することによって、価値観が多様化するなかで共通の価値を築く世界に、日本文化の「普遍的な価値性」を提示することを目指す。日本は、長い歴史のなかで、数多くの海外の文化を受容し、また、わが国独自の文化を開発してきた。この受容と創造の歴史過程のうちには、世界の文化が共感し、日本文化の価値を再認識し、新たな人間関係の方向性を創造することが、重要な課題となっている。地理的にも文化的にも日本の発展を促してきた東洋文化は、日本を内からも外からも包摂することができるとある。そのような中で東北大学が培ってきた分野の研究成果を結集・統合することによって、ますますこの課題の解決に貢献し、世界の文化の発展に貢献することを目指す。

2015年10月6日更新 © 2015 TOHOKU UNIVERSITY

2015年度、学際科学フロンティア研究所が公募した学際研究重点プログラムに、本研究科、文学研究科、東北アジア研究センターが共同して提案したプロジェクト「世界発信する国際日本学・日本語研究拠点形成」が採択されました。現在進行中のこの3カ年プロジェクトでどのような事業を行ってきたのか、また今後どのような方向に展開する見込みかを報告したいと思います。

このプロジェクト自体は、3部局が「これまで組織的に進めてきた日本学・日本語研究の研究プロジェクトを発展的に統合し、世界の先端的大学と連携して日本学および日本学研究的国際研究拠点を形成し、その成果を世界に向けて発信することによって、本学がワールドクラスの大学へ飛躍することに寄与すること」を目的としています。この目的を達成するために、本プロジェクトでは国際的に発信する日本学研究拠点の形成によって、世界において注目される研究成果をあげることを目指しています。特に日本学の分野で先端的な研究を行っている大学・研

究機関と連携を強化し、若手の研究者を招聘することで、次世代の学術的協力体制を主導し、様々なかたちで社会へインパクトを与えようという計画です。



2016年度の事業としては、主なものだけでも次のようなものがありました。

- ・東北大学・北京大学国際共同教育ワークショップ (6月)
- ・シカゴ大学との共同教育プログラム (9月)
- ・東北大学・タマサート大学 (タイ) 学術交流会 (9月)
- ・東アジア日本学研究者協議会 (韓国) でのパネルセッション「言語行動から見た日本文化」(12月)
- ・翰林大学 (韓国) と共催の国際シンポジウム「帝国日本の空間と移動」(2017年3月)

以上のような共同研究事業から、例えば次のような成果が生まれてきました。(以下は、プロジェクトの中間報告書からの抜粋です。)

◆言語行動から見た日本文化 (東アジア日本学研究者協議会パネルセッション)

「日本語には、相手の領域には踏み込まないように気を配る表現や、相手との仲間意識を醸成するための言葉のように、相手への配慮を表す言葉遣いが多い。現代社会は自分の利益を最大化することが求められるが、適切な配慮がなくては国内外を問わず、摩擦が生じるだけである。相手との距離を近づけたり遠ざけたりすることによって、対人関係を良好に保つ日本の配慮戦略は、「配慮」に相当する言葉のなかった韓国でも注目を集めており、輸出する価値のある文化である。」

◆史料調査に基づく地方史の研究 (シカゴ大学との共同教育プログラム)

「海外で行われている日本研究は、とすれば現地の資料 (史料)、あるいは1次資料を加工した2次資料に依存して行われることがある。これは海外の研究者が日本語で書かれた文書を直接読解する能力に欠ける場合があることから起こる状況である。しかし、それに関わらず海外には優れた研究が数多くある。国際日本学では、このような

研究と日本国内の資料 (史料) による研究をつなぐことによって日本文化の価値のより深い理解を目指す。これは「外の視点」と「内の視点」の融合から新たな文化価値を見いだすことを目指す「日本学」の趣旨にそったものである。」

◆歴史研究における独自性から普遍性への眼差し (翰林大学と共催の国際シンポジウム「帝国日本の空間と移動」)

「近年、グローバル化のもとで、移民や難民など、人の移動が激しくなり、それに伴って、諸問題が発生している。現代日本も、国際的な人の往来は活発で、来日外国人の数は過去最大にもなっている。日本の場合、こうした激しい人の移動が最初に現出したのが、大日本帝国の形が定まった第1次世界大戦後、とりわけ1930年代から40年代であった。その歴史と諸相を明らかにすることで、日本特有の移動に関する問題や、現在につながる移動後の社会とそこに存在する問題が明らかになる。」

このような成果はまだほんの一部であり、国際共同研究も緒についたばかりですが、さらに発展することが期待されます。

今後の展開としては、来年度から東北大学全体の研究拠点として「社会にインパクトある研究：創造する日本学」という学際研究重点拠点が設置されることが決まっており、文系の研究科すべてが連携したプロジェクトに展開する予定です。そのグランドデザインは10年後、20年後を見据えたものが出来上がって、東北大学のHPにも掲載されていますのでご覧ください。これに連動して、「東北大学グローバルイニシアティブ構想」の一環としての「国際共同大学院」(部局横断型、国際連携によるダブル/ジョイントディグリープログラム)のひとつに「日本学」大学院が2018年に開設されることが決まっています。研究と教育の両輪を備えた力強いプログラムが今まさに始動していたところです。興味のある方はぜひ研究科ホームページなどでご確認ください。



「土中より現れいづる仙台城の面影」 2016年12月23日開催 から

深澤百合子（国際日本研究講座教授）

公開講演会

土中より現れいづる 仙台城の面影

入場無料 100% 定員

日時 平成28年12月23日(金)祝日
13:00~17:00(12時30分開場)

会場 東北大学川内北キャンパス
マルチメディア教育研究棟6F大ホール

講演者 渡部 紀
東北大学大学院国際文化研究科准教授

講演1 13:10~14:00
石垣から読み解く仙台城跡
一発掘調査の成果から

渡部 紀
14世紀の教育施設文化財調査研究センター准教授

講演2 14:00~14:50
仙台城跡二の丸地区と武家屋敷
一東北大学川内北キャンパスの発掘調査成果

菅野智則
東北大学埋蔵文化財調査センター准教授

講演3 15:00~15:45
仙台城跡の歩みと発掘調査
一史料から読み解く「国許化」

藤田 緑
東北大学大学院国際文化研究科准教授

講演4 15:50~16:20
仙台城跡の歩みと発掘調査
一史料から読み解く「国許化」

伊藤 孟
東北大学考古学博物館准教授

開会
16:30~17:00(12時30分開場)
発掘調査から読み解く仙台城跡の歩みと発掘調査

マルチメディア教育研究棟6F大ホール

お問い合わせ先 東北大学大学院国際文化研究科
深澤研究室 (TEL: 022-795-7617)

主催 東北大学大学院国際文化研究科
共催 仙台市教育委員会、東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学考古学技術研究会

授業に遅刻しそうになって走って向かう講義棟への道が、かつては伊達藩の武士たちが歩いていた道であったと、時を超えて想像できる学生がはたして何人いるであろうか？ 執務を執り行う事務室が、かつての武家屋敷跡に建っていると想像できる教職員ははたしてどれだけいるであろうか？

今から約400年前に東北大学川内キャンパス構内は仙台城の城内であり、往来していたのは学生たちではなく侍たちであり、藩主の家族たちであった。彼らが職務を遂行し、寄りあい、また奥と呼ばれる場所では政宗の家族たちが日常の生活を営んでいたのがあった。このような歴史的環境に恵まれながら、全国各地から入学してやって来る学生や、さらには海外からの留学生たちは、学生時代をここで過ごしても、この事実を知らずして去って行くとすればそれはたいへん残念なことになる。東北大学川内キャンパスは仙台城跡という歴史遺産として有効に活用していきたいものである。

「土中より現れいづる仙台城の面影」と題して行われた本公開講演会は、川内キャンパス構内外でこれまでおこなわれてきた仙台城跡発掘調査の成果を公開し、明らかになってきた仙台城の姿に迫る講演会で、講演会場である北キャンパスのマルチメディア教育研究棟正面の石垣上も武家屋敷の裏庭にあたり、池や井戸の跡が発掘されたところである。

川内キャンパス構外の周辺地域（仙台市立博物館周辺や政宗像が建つ本丸跡、周辺の石垣跡）は仙台市教育委員会文化財課仙台城史跡調査室が、川内南、北キャンパスの構内は本学埋蔵文化財調査室が発掘調査を担当している。発掘調査の成果から実証的に確認できた跡を仙台城の面影として見定め、さらに出土した遺物から当時の生活を偲びその時代を生きた人々の姿を読み取るのが本講演会の趣旨であり、そのような趣旨から講演内容は、400年前の仙台城の面影を発掘調査の成果から理解できたことと文献史料から読み取れる史実によって蘇らそうというものである。



講演は4題おこなわれた。その内容として、講演1は仙台市文化課の渡部紀氏による「石垣から読み解く仙台城跡」、講演2は東北大学埋蔵文化財調査室の菅野智則特任准教授による「仙台城跡二の丸地区と武家屋敷」と題して発掘調査の成果が明らかにされた。仙台城の石垣については、2011年3月の東日本大震災による崩落が激しく、その修復に時間がかかっているが、その過程で石の積み方、組み方などによりこれまでの修復が明らかになり、時代の背景や地震などの災害履歴などで修復され続けていることがわかる。本丸の石垣から出土した遺物はヨーロッパ産のガラスの破片やガラスなどもあり国際色豊かで華やかな本丸の生活を想像することができる。南キャンパスの経済学部の建物や大学付属図書館の裏手からは西屋敷跡として政宗の家族や仕える女中などが生活した

痕跡が発掘されている。講演中に示された遺跡から出土した遺物の数々は講演会場において展示された。本学埋蔵文化財調査室の柴田慶子調査員によって展示物の説明がおこなわれた。



さらに、当時の仙台城に集った人々やその生活を鮮やかに蘇らせたのは、国際文化研究科藤田緑教授による講演3「仙台城下を訪れた黒人」と題しての講演であった。講演は1611年11月10日にセバスティアン・ビスカイノが仙台城を訪問した時の記録から、仙台城の門には多くの兵士が整列していたこと、仙台城はこの国で最も勝れかつ堅固である城のうちのひとつで、水深い川に囲まれ、険しく切り立ち高くそびえた断崖の上に築かれており、そこからの眺めは、家屋の大きさは江戸と同じだが、その構造は江戸よりまさる家々が並ぶ町が見え、その先には海岸が望めるということが紹介された。またビスカイノにともなって黒人が訪れていたことも講演の参加者は初めて知るところとなった。講演1、2によって実証された仙台城の往時の姿に続き、講演3はまるで当時の仙台城にタイムスリップしたような感覚が味わえた。当時の仙台の認識が改まるような興味深い内容であった。

講演4は「仙台城跡遺跡の歩き方地図作成」としておこなわれ、地下鉄東西線の国際センター駅から始まり、仙台城の三の丸跡、本丸跡を経由し、さらに二の丸跡を通過して地下鉄東西線の川内駅までの見学ルートを地図として提示した。この地図は東北大学考古科学技術研究会（学友会准加盟団体）の会員が仙台城の魅力を発信するために作成したもので、講演は代表して理学部2年の伊藤孟君がおこなった。会員の学生諸君がみずから歩き、写真を撮り、独自の視点から構成し、作り上げたオリジナリティ満載の地図である。実際に発掘がおこなわれたところは、新しい建造物に建て替えられているため、キャンパス構内でその場所がわかりにくい。そのため歴史遺産である事実が

わからなくなる可能性があるため、遺跡の場所を廻れるように「歩き方地図」を作成した。

この公開講演会を通して、仙台城をより身近に感じ、川内キャンパスとその周辺を歩くときに、これまで見えなかった仙台城のある景色が鮮やかに見えてくる人々が増えることを望むしだいである。



「アルムニひろば」同窓生のコラム

イ ギョンスク
李 敬淑

宮城学院女子大学学芸学部日本文学科准教授
(アジア文化論講座博士後期課程修了)

私は2014年4月から宮城学院女子大学学芸学部の日本文学科に所属し、映画・テレビドラマ・漫画・アニメなど、日本の現代大衆文化に関する授業を担当しています。韓国のソウル生まれ、ソウル育ちで、留学のため日本にやってきたのが7年前なので、そのおよそ半分の期間を東北大学大学院の博士後期課程生として過ごし、その時に学んだ多くの事を今現在仕事に生かし始めていることになります。教員として新米であることはもちろん、日本在住の外国人研究者としての生活もまだ長いとは言えないですが、だからこそ楽しく、何事も新鮮に思い、挑戦し続けられています。皆さん、どうぞ宜しくお願い致します。

さて、私が担当している科目の話をしてみましょう。私の専門は、日本映画史です。授業では主に日本の映画を題材にして日本人が何を映画にしてきたか、そしてそこに含まれている意味や社会歴史的な背景はいかなるものなのかについて勉強しています。映画と言ってもそのジャンルやテーマは多岐にわたり、授業ではよくあるメロドラマから時代劇まで、そして任侠（やくざ）映画からピンク映画、怪獣映画、特撮映画まで本当に本当に色んな映画を観て、感じて、語っています。「名前は聞いたことあるけど、実際に観たのはこれが初めて!」「日本の映画が110年間こんなに目まぐるしく発展してきたとは!」「オタク文化だと思い込んでいたけど、こんなに奥深い世界があるなんて目から鱗!」という受講生からの感想が嬉しく、とにかく学生さんたちと毎回盛り上がっています。

そんな中でも、私が一番力を入れている科目は「表象文化論」という3・4年生向けの科目です。去年の「表象文化論」では、テレビドラマ『あまちゃん』における「震災」の表象、漫画『進撃の巨人』における「巨人」の表象、アニメ『プリキュア』シリーズにおける「性」の表象、映画『君の名は。』における「時空間」の表象、映画『この世界の片隅に』における「戦争」の表象など、いわゆる「日本映画文化の古典」とは少し距離を置いている（かなり最近の）作品を研究対象にした学生発表がありました。学生発表とはいえ、先行研究の検討や研究目的・方法の設定、そして考察の展開・結論づけまでのすべての段階に教員の私が付き合うことになっています。それぞれのチーム発表に約一ヶ月半の時間をかけ、総10回くらいの打ち合わせをしながら、一緒に悩み、一緒に苦しむ。そしてその過程で教員と学生の上に信頼が生まれ、成長が生まれ、達成感が生まれる。知識習得もいいものの、これこそが大学で一緒に勉強することの真の価値だと思っております。何より「考えることの楽しさ」に気づいてもらえた時の嬉しさは、新米教員としてはたまらないものです。

とはいっても、「映画を勉強する」ということはただ

ただ楽しいだけではありません。それはなぜでしょう。最近とみに考えていること（学生さんたちに口酸っぱく言っていること）を申し上げますと、映画作品を後世に残す意義があるとすれば、それは映画が20世紀の人類の愚かしさをこれ以上ないほどに克明に記録しているからです。むしろ人類は20世紀だけでなくそれ以前もそれ以降もそれどころか現在進行形でますます愚かでありつづけていますが（人類の皆さん、すみません）、しかしそれでも20世紀に人類が犯した愚かしさはさすがに度を超えていたのではないかと思います。その中でもナチス・ドイツの台頭を許したのは間違いなく人類史上最大の過ちの一つで、あまりにも常軌を逸しているがためにその異常性に対する我々の感性はほとんど麻痺しかかっていますが、これは絶対にありえてはならなかった事態だし、今後も絶対にあってはならないことです。

20世紀に精神分析と映画とファシズムの隆盛が重なったのは必然だったろうと思います。とりわけ映画はファシズムを強力に後押しし、同時にその蛮行を記録してもしました。20世紀に二度の世界大戦を看過するどころか積極的に推し進めてきた映画が、21世紀になお生き延びることを許されたのはチャップリンの存在があったからだ、と述べたのは確か四方田犬彦だったと思いますが、むしろチャップリンの映画も『独裁者』であれ『モダン・タイムス』であれ、ある種のプロバガンダたらざるをえません。映像が持っている恐るべき力を21世紀の人類は正しく恐れ続けなければならないし、それは22世紀になっても23世紀になっても30世紀になっても同じことです。

繰り返しになりますが、我々が何か具体的な映画作品をさしあたり擁護し、古典としての延命を企図しなければならないのだとすれば、それは映画が人類の愚かしさの生き証人として存在しているからです。ということを考えますと、やっぱり映画を「ただ楽しく観ればいいもの」としてしまうのは、ちょっともったいないかもしれません。

このように「映画の楽しさ」と「映画の重み」とをバランスよく考えていくことにより、きっと日本の文化や歴史について改めて学ぶこと、新しく感じる事が出来ると思います。そして私自身がその「バランスの良さ」の大事さを学べたのは、多様な考え方に柔軟に対応できる姿勢を教えてくれた、国際文化研究科の先生方や研究仲間たちのお蔭です。恩師や友人たちと過ごした時間に、独り立ちした今も支えられています。



事務局より

①「アルムニひろば」について

前々号から新たに同窓生のコラム「アルムニひろば」を設けました。「アルムニ alumni」は同窓生を意味するラテン語です。このページでは、修了後の同窓生の活動を紹介してゆきます。投稿も歓迎いたします。

②同窓会メールマガジンについて

事務局では会員の皆さまに興味をもっていただける情報を随時お届けしたいと思います。また、会員の皆さまからもメールマガジンに掲載してほしい情報などをお寄せください。

③メールアドレスについて

メールアドレスを変更された方や未登録の方は次のアドレスにご連絡をお願いします。メールアドレスは厳密に管理し、同窓会・研究科からの連絡をお送りする目的にのみ使用します。

国際文化研究科同窓会

<int-dosokai@grp.tohoku.ac.jp>

④同窓会ホームページ

これまでの総会、理事会、会報、その他の資料を掲載していますのでご覧ください。

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/alumni/>

⑤同窓会懇親会について

事務局では今後とも会員の要望に基づき懇親会を開催したいと考えていますので開催希望などお寄せください。

⑥ご意見・ご提案等を！

同窓会についてのご意見・ご提案等がございましたら事務局までお知らせください。宛先は本会報の題字欄に示してあります。また、ご住所・勤務先・メールアドレス等に変更がございましたらご連絡願います。お寄せいただいた個人情報は厳密に管理し、同窓会・研究科からの連絡をお送りする目的にのみ使用します。

⑦会費・寄付金の納入のお願い

会則第11条第1項及び12条に基づき会員の皆様に会費等の納入をお願いいたします。

○入学、進学及び編入学者で未納の方

(1) 国際文化研究科前期課程の学生：6,000円

(2) 国際文化研究科後期課程の学生：

編入学者：8,000円

進学者：6,000円

○上記以外の方(修了生、在学生、現教職員・元教職員等)にはご寄付という形のご支援をお願いできますと幸いです。

○会費・寄付金とも、郵便局からお振り込みいただくか、国際文化研究科教務係窓口にご納めください。

郵便振替口座名称：国際文化研究科同窓会

郵便振替口座番号：02220-5-6662